

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：14201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653292

研究課題名(和文)音楽科教育法の授業における「音楽づくり」の現状と指導プログラム開発

研究課題名(英文)Teaching Method Development of Creative Music Making in Teacher-training Course

研究代表者

林 睦(HAYASHI, Mutsumi)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：40402698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：小学校音楽教育における「音楽づくり」は、指導要領に取り入れられて20年以上が経過しているが、教師にとっては内容や指導法が理解しにくいと言われており、現場で実践が十分に広がっているとは言えない状況にある。そこで、教員養成大学の初等音楽科教育法の授業の中で「音楽づくり」を指導するプログラムを開発して実践し、学生の反応を分析した。その結果、1コマ(1時間半)のプログラムでも、「音楽づくり」のエッセンスをつかむことができ、94.7%の学生が将来教員になったときにやってみたいという意欲を持つことができた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop a pilot program of teaching creative music making in teacher-training course. Based on the government course curriculum guidelines of elementary school, the pilot program consists of two parts: playing with sounds and making music. The survey for the students of teacher-training course who experienced the pilot program revealed that only one and half an hour program can effect them to grasp what creative music making is, and 94.7% of them have will to teach creative music making in schools when they become teachers.

研究分野：音楽科教育

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：音楽づくり 音楽科教育法 教員養成 指導プログラム開発 大学

1. 研究開始当初の背景

小学校音楽教育における「音楽づくり」は、指導要領に取り入れられて20年以上が経過し、新学習要領では表現活動領域のひとつとして位置づけられ、その重要性が強調されているが、教師にとっては内容や指導法が理解しにくいと言われており、現場で実践が十分に広がっているとは言えない状況にある。これまで「音楽づくり」の研究と普及の方法は、現場の教師向けの指導法や実践集の発行、自治体による研修などが主な方法であった。しかし、このような現場の教師へのアプローチだけでは「音楽づくり」領域の十分な広まりと深まりが見られないならば、小学校教育における「音楽づくり」の実践の現状と問題点を調査した上で、教員養成大学の初等音楽科教育法の授業の中で「音楽づくり」を指導するプログラムを開発してはどうかと考え、研究を始めた。

2. 研究の目的

小学校現場への「音楽づくり」のさらなる普及のために、小学校教育における「音楽づくり」の実践の現状と問題点を把握した上で、教員養成大学の初等音楽科教育法の授業の中で、「音楽づくり」の指導プログラムを開発し、提案することを目的とする。

3. 研究方法

以下のような方法で研究を進めた。

- (1) 初等音楽科教育法の授業における「音楽づくり」への質問紙調査とその分析
- (2) 「音楽づくり」の指導プログラム開発
- (3) 現職教員への「音楽づくり」の指導についての実態調査・研修の実施

上記の方法で進めた研究の成果を以下に記す。

4. 研究成果

(1) 初等音楽科教育法の授業におけるモデルプランと質問紙調査

モデルプランについて

初等音楽科教育法の授業における音楽づくりの授業のモデルプランを以下のような意図のもとに立てた。モデルプランの構成は2つの部分からなる。これは小学校学習指導要領での(ア)「音遊び・即興的な表現」と(イ)「音を音楽にしていく活動」によっている。(ア)としては、簡単だが音楽づくりの面白さが感じとれる基本的な音楽ゲームを、(イ)としては、身のまわりの物、ボディパーカッション、声を使った音楽をつくることにした。このモデルプランを実践することで、事項(ア)(イ)の活動の違いやそのつながりが感じられるように構成した。また、内容の選定にあたって注意した点は、誰もが簡単に実践できること、特別な楽器等がなくても実践できること、音楽づくりの本質的な面白さや評価について体感できるものということである。時間であるが、授業が全体で15回あるうち、内容の重要性と他の内容とのバランスから、授業回数1回以内(約1時間～1時間半)でできることが適切と考え、プランを立てた。

事項(ア)「音遊びや即興的な表現」としてクラス全員での音楽ゲームを扱った意図としては、個人の音楽の技能に関わらず全員が音遊び・即興表現を楽しめること、その場で簡単に音遊び・即興表現ができるということ、アイスブレイクの効果があることである。また、音楽をつくるというと、和声にあった音やリズムをつくりあげなくてはというイメージや記譜が必要というイメージがつきまとい、敷居が高くなる傾向があるので、楽譜が読めなくても、西洋クラシック音楽でなくても、簡単に自分の創造性を発揮して音楽をつくることを示すために、いつでもどこでもできる簡単な音楽ゲームを

導入した。具体的には、「手拍子まわし」「名前のリレー」「リズムのサンドイッチ」であり、音から構成へとのつながりを意識している。

事項(イ)「音を音楽にしていく活動」では、身の回りの物、ボディーパーカッション、声をつかった音楽をグループでつくることにしたが、これは特別な楽器を使わずに身近なもので音を音楽に構成していく過程を体験してほしいという意図が込められており、(ア)で学んだ音素材や表現方法を生かせるようにとも考えた。いきなりつくるのは難しいので、音楽が専門の学生たちがつくった短いパフォーマンスのサンプルを見せてから、つくってもらった。最後にグループ毎につくった音楽を発表するようにした。

質問紙調査について

本研究では、初等音楽科教育法の授業で音楽づくりの教授法を効果的に体験することの重要性を明らかにすることを目的としている。そのために、筆者の勤務校である滋賀大学教育学部の「初等音楽科教育法」の中で、音楽づくりの指導プログラム(上記のモデルプラン)を実践し、その前後に学生に質問紙調査を行うことにした。初等音楽科教育法は、小学校教諭免許を取得しようとする学生の必修科目で、2回生配当、半期(15回)で2単位の授業である。調査の手順としては、前時に音楽づくりに関する事前アンケートを行って学生の音楽づくりについての予備知識の度合いを調べ、翌週に上記のような音楽づくりの授業のモデルプランを実施し、終了後に事後アンケートを行い、事前、事後アンケートから分析を行った。

- 1 事前アンケート

これまでに「音楽づくり」や「つくって表現」という言葉を聞いたことがあるかどうか尋ねてみたところ、「ある」が50.1%、「ない」が49.1%という結果になった。「ある」のう

ち、高校までの授業で知っていた学生は34.1%であり、64.8%の学生が大学の授業で知ったと回答した。

次に、「音楽づくり」に関連しそうな活動の経験があるか、具体的な活動を挙げて探ってみた(複数回答可)。その結果、「手拍子でリズム遊びをする」が82.7%で最も高く、次いで「ボディーパーカッション」50.3%、「手作り楽器を使って演奏する」37.6%、「五線譜を使って音楽をつくる」29.5%、「動きを音であらわす」21.4%、「お話に音楽をつける」12.7%、「五線譜以外の方法(絵、図、線など)を用いて音楽をつくる」5.8%、「詩や言葉から音楽をつくる」5.8%、「このような体験はない」12.1%となった。

さらに、あえて五線譜を使わないような系統の音楽について、「音楽づくり」を実践してみたことがあるか聞いてみた。このような「体験がない」が55.5%と最も多く、体験があるもののなかでは、多いものから順に「身のまわりにある楽器以外の物で出せる音」31.2%、「歌う声、ため息やささやき声など」11.6%、「生活の中で耳にする音や自然の音」8.1%、「擬音語、擬声語」7.5%、「電子音」6.4%で音楽をつくった経験があるとの回答を得た。

- 2 事後アンケート

事前アンケート、モデルプランの実施を経ての事後アンケートの結果を記す。モデルプランの中の「音楽ゲーム」「身のまわりのもので音楽づくり」について、「とても楽しかった」「楽しかった」「どちらとも言えない」「つまらなかった」「とてもつまらなかった」の五段階で評価してもらったところ、「音楽ゲーム」は「とても楽しかった」46.3%、「楽しかった」44.7%、「どちらともいえない」8.0%となった。「身のまわりのもので音楽をつくる」は「とても楽しかった」47.3%、「楽しかった」44.3%、「どちらともいえない」6.4%となった。いずれも「つまらなかった」

「とてもつまらなかった」と答えた学生はいなかった。また、このモデルプランの体験から、音楽に対する見方が変わったかどうか聞いたところ、「変わった」75.0%、「変わらなかった」20.2%となった。さらにどのような点で変わったと思うか尋ねたところ（複数回答可）、多い回答から順に「即興的な表現も音楽になると知った」40.4%、「リズムだけで音楽ができることを知った」29.8%、「楽器でないものの音で音楽をつくることができることに気づいた」27.1%、「ひとつのものから様々な音の出し方を工夫できることに気づいた」20.2%、「五線譜を使わなくても音楽がつけられることを知った」16.5%、「拍や拍子がない音楽があることを知った」15.4%、「その他」1%となった。最後に、卒業後、小学校で音楽を教えることになったら、音楽づくりの活動してみたいか尋ねたところ、「ぜひやってみよう」53.7%、「やってみよう」41.0%、「あまりやりたくない」3.2%、「やりたくない」1.0%となり、「ぜひやってみよう」「やってみよう」を合わせると、94.7%の学生が、将来、教育現場で音楽づくりをやってみようという回答した。

滋賀大学教育学部における初等音楽科教育法の授業での学生への質問紙調査や指導プログラム開発から、教員になる前の時間的に余裕のある時期に、若い柔軟な感性に働きかけることで、たとえ1時間程度の指導時間しか取れなくても、やり方によっては十分に音楽づくりのエッセンスを伝えることができると感じた。

（2）現職教員への「音楽づくり」の指導についての実態調査・研修の実施

大学での音楽づくりの指導だけでなく、現職教員に向けて、音楽づくりの研修の機会も必要であると感じた。調査の結果、実際は音楽づくりに取り組めていない教員もかなりの割合にのぼっており（今回調査した対象では59.5%）取り組めない理由を調べた結果、

多い順に「指導方法や指導内容がわからない」37.8%、「時間的に厳しい」16.2%、「校務が忙しく、手がまわらない」13.5%となった。音楽づくりを指導する上での問題点についてさらに聞いてみたところ、「子どもの発想をどのように作品にしていってよいかわからない」35.1%、「作品の評価の仕方がわからない」29.7%、「具体的な指導法や手立てがわからない」27.0%、「大学時代に指導されていないのでイメージがわからない」16.2%と続いた。最大の理由は時間のなさよりも、指導の内容や手立てがわからない点であることが判明した。

音楽づくりの指導についての書籍等も参考になるであろうが、やはりワークショップ形式等の教員研修会で、実践してみよう指導の手立てを体験してみることが必要であると考えたので、滋賀県大津市で、市の音楽研究会とタイアップして、3回の研修会を開催した。その結果、指導の方法や手立てがわかり、音楽づくりが身近なものに感じられるようになったという意見が寄せられた。

（3）新たな音楽づくりの授業にむけて

新たな音楽づくりの授業のかたちを求めて、芸術家を学校に派遣している地域のNPOと連携して、「音楽家と一緒に音楽をつくる授業」を実施してみた。今回は、作曲家、和太鼓奏者と音楽をつくるプロジェクトを大津市内の2つの小学校とタイアップして行った。

本研究から、今後も勤務校で音楽づくりの指導プログラムを実践していくとともに、この指導プログラムを学会等で発表し、提案していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

研究結果が出揃った今年度(平成26年度)
に研究を発表する予定である。

6. 研究組織

(1)研究代表者

林 睦 (HAYASHI, Mutsumi)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：**23653292**